

# 児童福祉施設等における保育実習が学生に与える影響

大村 海太      高玉 和子

## Influence of Practical Training at Social Welfare Institution on Students

Kaita OMURA / Kazuko TAKATAMA

### 論文要旨

保育士養成課程において保育士資格を取得する際、保育所と児童福祉施設等における実習は必修科目と定められている。保育者養成校に入学する学生の多くは幼稚園教諭、あるいは保育所保育士として勤務することを想定している。しかし、入学後に保育士の資格必修として行われる児童福祉施設等における実習を経験した学生の中に、児童福祉施設等での勤務を志望する学生がいる。そこで、本稿では保育実習Ⅰでの施設実習において、実習のどのような要素が学生自身の進路や保育者像に影響を与えているかということについて、インタビュー調査による質的分析を行った。その結果、6のカテゴリとそれぞれに付随するサブカテゴリが抽出され、多くの学生は物的環境より人的環境に魅力を持っていることや、福祉型保育士としての視点や技術が身についていたこと等が明らかとなった。

キーワード：施設実習 インタビュー 自己効力感 質的テキスト分析

### 1. はじめに

一般的に保育士養成課程では、特に施設に就職する福祉型保育士の養成コースを設置していることはまれである。保育所を除く児童福祉施設や社会福祉施設に関心が高い、あるいは施設への就職を入学前から考えている学生が、施設実習を2回行う保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲを履修しているのが現状である。筆者らは保育実習Ⅰ（施設）・保育実習指導Ⅰ（施設）と保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲを担当しており、より充実した実習を行うためにはどのように教授、指導していくべきかを模索している。

近年の傾向として、2回の施設実習を希望する学生が少しずつではあるが微増し、今年度は一学年の約4割となる学生が保育実習Ⅲおよび保育実習指導Ⅲを履修している。このような状況もあり、保育実習Ⅰにおける施設実習が学生

にどのような影響を与えているのかについて調べていくことにした。将来福祉型保育士になるために必要となる望ましい知識や技術、支援方法などを指導していくため、施設実習を経験した学生へのインタビュー調査を実施し、その調査結果を分析することにより明らかにしていきたいと考えた。

### 2. 背景と先行研究

わが国における保育士養成課程において、2017年に保育所保育指針が改訂され、同年12月には「保育士養成課程の見直しについて（検討の整理）」が公表され、効果的・効率的な教育を実施するための観点として、「保育所等の保育関係施設のみならず、児童養護施設や障害児支援関係施設を含めた保育士が勤務する多様な施設を念頭に置いた、子ども（18歳未満）

および家庭（保護者等）への支援の実践」が示された（保育士養成課程等検討会、2017）。

児童福祉施設等における保育実習（以下、施設実習）ではその実習先の種類が多岐に渡っており、乳児から成人、母子を対象とした施設がその対象となっているが（表-1）、それぞれの施設における詳細な実習内容や保育士養成の観点から実習にどのような効果があるかという点においては、明らかにされていない。

表-1 保育実習 I における実習施設の種別

乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る）、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設<sup>1)</sup>、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

1) 児童福祉法の改正に伴い、2017年4月1日より「児童心理治療施設」に名称変更。

保育実習実施基準（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長、2018）では、保育実習の目的を、「その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させること」と明記されているが、赤瀬川、友川（2015）は、保育士養成校の教育課程とそれに基づく授業内容は、保育所における保育を想定した内容が多いこと、現状では、保育所保育士と施設保育士の保育や業務内容及び求められる資質、その比重が明確に整理されているとはいえず、あいまいなまま保育士養成教育が行われていると指摘している。また、今回の保育所保育指針改訂について、柏女（2018）は、保護者支援や、一人ひとりのニーズに応える視点といった「福祉的視点」が曖昧化されていると指摘している。

施設実習を行った学生の多くは、実習中に起こった出来事や実習プログラムにおける学び、利用児・者、職員との出会いによって自身の保育観や人生観に多大な影響を受けている。中にはそのまま施設でボランティアやアルバイトを始め、就職を志望する者もいる。大きな影響を与える施設実習だが、実習のどのような要素が実習生に影響を与えているかというテーマに関する研究は少ないのが現状である。河野（2011）は、保育学生の施設実習に対する自己効力感について、岡田（2008）が開発した生活支援自己効力感尺度を用いて、施設実習に対する実習達成感との関連を調べた結果を記している。ここでは、実習の事前指導の重要性が指摘されており、前向きに生活支援活動が行えるように指導していくことが、実習達成感の向上につながるとしている。この他には実習の効果的な実施方法（全国保育士養成協議会、2018）等の研究が挙げられるが、実習によって学生はどのような影響を受けているかといった研究、特にインタビューによる質的研究はほとんど見ることができなかった。

質的研究において、調査対象となる人々の意味世界を構成する現場の言葉を、研究者コミュニティの意味世界における理論の言葉に移し替えていく作業は非常に重要な意味を持っており、それによって、他の事例や出来事理解を超えて一般的なパターンや法則性を割り出していくことができるようになる（クカーツ＝2018、221）。そこで、本研究では、児童福祉施設等で施設実習を実施した学生は、実習での学びをどのように捉えているのか、また、実習のどのような要因が学生のキャリア志向に影響を与えているのかということについて、インタビュー調査によってその一旦を明らかにすることを試みた。

### 3. 研究方法

#### (1) 調査対象

調査対象は、A短期大学の2年生18名である。

A 女子短期大学では、2年間の保育士養成課程の中で、多くの学生は1年次に1週間の教育実習、2週間以上の保育実習Ⅰ（保育所）を済ませ、1年次の年度末に保育実習Ⅰ（施設）を行う。本研究では1年次に保育実習Ⅰ（施設）を終了し、2年次に保育実習Ⅲを選択した学生を対象とした。調査時期により、保育実習Ⅲを既に終えている学生も含まれているため、2つの施設実習に関する内容が混在している箇所もある。インタビュー対象者が保育実習Ⅰ（施設）を実施した施設は、児童養護施設11件、障害者支援施設6件、生活介護1件、保育実習Ⅲを実施した施設は児童養護施設6件、乳児院3件、障害児入所施設3件、児童発達支援センター1件、障害者支援施設2件、生活介護事業所1件である。

## （2）調査方法および倫理上の配慮

2018年9月下旬～10月中旬に、調査協力者のプライバシーに配慮できる場所において半構造化面接を行った。インタビューガイドは（表-2）の通りである。

表-2 インタビューガイド

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>①施設実習を通して、保育者としてどのように意識が変化しましたか。</li><li>②実習を通して、保育の専門性が身についたと思いますか。</li><li>③施設で働くことに興味を持ったのはなぜですか。</li><li>④幼稚園や保育所での実習と施設実習では学びにどのような違いがありましたか。</li></ul> |
|--|

調査協力者の同意を得て、ICレコーダーへ録音、逐語化した。個人や施設が特定されないよう、調査対象者はIDによって区別し、対象

者の言葉をできる限り用いた上で、データの内容に即した短い言葉で要約したり、一般的な言葉に置き換えたりした。インタビュー時間は、30分～50分、インタビュー回数は全員1回ずつであった。インタビューの実施に先立ち、駒沢女子大学・駒沢女子短期大学研究倫理委員会による倫理的な審査・承認を得た（承認番号2018-026）。

## （3）分析の手順

分析は、テーマ中心の質的テキスト分析法（クカートツ = 2018）を用いた。共同執筆者同士のディスカッションによってリサーチ・クエスチョンの明確化とコーディングの方向性を打ち合わせた上で、①テキストの重要な箇所にマークを付けてメモを書く、②主要なテーマ関連のカテゴリを作り上げる、③メイン・カテゴリを使って全データをコーディング、④同じメインに属するテキストの該当箇所の全てをリストアップ、⑤必要に応じてサブ・カテゴリを作る、⑥ブラッシュアップしたカテゴリ・システムを使って全データを再コーディングといったプロセスを辿った。分析にはMAXQDA2018（Release18.1.1）という質的分析専用ソフトを使用した。

## 4. 調査結果

複数のインタビュー間の類似点と違いについて調べ、回答者全員あるいは一部の回答者に典型的に見られる一般的な傾向ないし兆候をコーディング（クカートツ = 2018, 47）した結果、711のコードが抽出され、上述の分析の結果、6のカテゴリと15のサブカテゴリが生成された（表-3）。以下にその詳細と分析結果を論じる。

表-3 カテゴリとコード一覧

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
①施設に興味を持ったきっかけ	幼少期～学童期	保護者の障害、保護者の職業、入所児童のクラスメイト、ボランティア体験
	中学～高校	書籍、ドラマ、報道番組
	入学後～実習前	授業、動画サイト、報道番組
②施設の魅力	利用児・者の印象	学生と利用児・者の関係、明るい、可愛い、ありのままの姿
	施設職員の印象	職員と利用児・者の関係、学生と職員の関係、職員同士の関係、職員が明るい、情熱、ありのままの姿
	関わり方	個別的な関わり、生活の中での支援、高齢児との関わり、乳幼児との関わり、障害児・者との関わり、長期間の関わり、心地よさ
③利用児・者の言動や背景	言動	落ち着きの無さ、コミュニケーションが苦手、夜中の覚醒、怒り・暴言、注意獲得行動、支配・被支配関係、性的な問題、強い承認欲求、愛着的な課題、引きこもり
	入所背景	会議、児童票・ケース記録、職員からのヒアリング、利用児・者からのヒアリング
④専門的な支援	情報の共有と連携	朝礼、カンファレンス、引継ぎ、迅速な対応、施設内連携、外部機関との連携
	専門職や支援技術	専門職、気づく力、褒め方・注意の仕方、受容、標準化された支援、尊厳を守る関わり、性暴力プログラム、心理的支援、多角的な視点、理学療法・作業療法、音楽療法、健康管理、自立支援や長期的な視点、保護者支援
⑤身につけた力	支援技術	アセスメント力、コミュニケーション技術、介助技術
	援助者としての態度	個別化、意図的な感情表出、統制された情緒的関与、受容、非審判的態度
	生活力・意欲	生活力、人格的成長
⑥意識の変化	学習意欲の向上	やりがい、もっと学びたい、自分も専門的な支援ができるようになりたい
	支援者の視点	自分に何ができるか考えた、偏見からの脱却、何が支援になるのか考えさせられた、利用児・者にとって本当の幸せは何かと考えるようになった、自分は施設職員に向いている

### ①施設就職を希望する動機

このカテゴリでは、施設就職を希望するようになったきっかけについて語られた内容を、入学前の『幼少期～学童期』『中学～高校』、そして『入学後～実習前』の経験に分類した。

『幼少期～学童期』では、学生の保護者の障がい、保護者の職業、自分の通う学校に施設から通っている子どもがいたこと、主に障がい分

野におけるボランティア経験等、身近に施設との接点があったことが述べられた。『中学～高校』では、書籍やメディアによって子ども虐待や少年犯罪を犯す子どもの愛着や心理的な課題について知ること、入学前から施設に対して関心を持ち始めたり、この頃から施設への就職を希望している者もいた。『入学後～施設実習』では、社会的養護や乳児保育、特別支援教育等、

それぞれの領域に関連した科目を履修したことで、興味を持ち始め、また、興味を持ったことで自分から動画サイトやインターネットで自分の興味を持った領域についての情報を調べるようになった者もいた。

これらのことから、学生たちは入学前からライフステージの様々な時点で施設に対する興味を持ち始めたこと、また、入学後は施設に関連した科目を受けることによって、主体的に学ぼうとする者もいることが示唆された。入学時点や施設実習前後における各段階において、学生が施設実習に対してどのような考えを持っているかを文章化させることで、より意欲を持って実習を実施できるのではないだろうか。

## ②施設の魅力

このカテゴリでは、利用児・者や職員、施設全体に流れる雰囲気等、学生が実習で感じた施設の魅力についてのコードが抽出された。

『利用児・者の印象』では、学生と利用児・者の関係について多く語られた。障害者支援施設では「おばあちゃんの利用者さんが手を引っ張って、お部屋に連れいって、『DVD見よ』って言ってくれたのがすごく嬉しかった」ことや、児童養護施設では施設での生活や進路の話をしている中で、「最後にポロっと本音を話してくれた」こと等、利用児・者との信頼関係や本音を聞いたことに対して「信頼してもらえた」「心を開いてくれた」「関係を深めることができた」と感じていたことが語られた。また、障害者支援施設で実習した学生からは、利用者の行動が「かわいい」と思ったことが語られており、どの施設でも幼稚園・保育所とは異なり、利用児・者が怒りや反抗等、感情を出しても「誰もがありのままの姿を認められる」施設の雰囲気に魅力を感じていた。

『施設職員の印象』では、職員の子どもへの関わりを見る時、「みんなが子どものことを考えている」「寄り添っている」と感じ、また利用児・者も「子どもが職員さんのことをとても

好き」と思っているように感じたこと。そして、「自分もそんな信頼関係を築けるような職員になりたい」と職員へ憧れを感じるようになっていったことが語られた。学生と職員の間では、学生が利用児・者との関係に難しさを抱えていた時に、職員からアドバイス、時には職員自身の失敗談を分かち合ってもらったことで、励ましを受けたり職員に憧れを持つ者もおり、同じようなキャリアを積むため、乳児院で働く前に保育所で勤務したいと思うようになった者もいた。「パートの方も専門的な支援者の一部に位置付けられ」ており、職員集団全体が、「誇りを持って働いている」ことや、「すごい信頼合っているって言うのが見てて伝わった」こと、また、「施設は子どもにとって私的な空間だけど、職員さんにとっても私的な空間のように感じました。勿論仕事の場ではあるんだけど、施設の方が自分のプライベートをさらけ出しているように感じました」と語る者もいた。学生の中には、職員の望ましいとは思えない言動や支援、子どもの職員に対する愚痴を聞いたことで、施設職員に疑問を感じた者もいたが、それによって施設への魅力が必ずしも減退するわけではなく、「自分だったらこうする」と、なお一層施設就職への思いを増したと語る者もいた。

『関わり方』では、それぞれの施設における利用児・者との関わりについて多くの学生が語った。特に、「施設って関係がこんなに深くなれるんだなって思った」と語る者が多くいるように、利用児・者と深く個別的な関わりができること、「職員も一緒に生活して、生活を見せなきゃいけないし。そこに気楽さを感じた。自分にとってはそれが合っていると」語る者がいるように、生活の中での支援、また、利用児・者の長期的な視点で見た成長や退所した子どものアフターケア等、長期間における関わりができることに魅力を感じているという意見が多くあった。

これらのことから、実習した施設では子どもだけでなく、職員集団もあるがままの姿でいら

れる部分があり、それを体験した学生自身も心地よさを感じていたこと、この感覚を感じながら仕事ができることに魅力を感じていたことが考えられる。また、施設実習前の保育士養成課程における幼稚園や保育所での実習で、保育に対する魅力を見失いかけていた学生でも、施設実習での利用児・者との関係を通して、保育者になることにもう一度魅力を見出せるようになることが示唆された。

### ③利用児・者の言動や背景

このカテゴリでは、学生が実習先で出会った利用児・者の課題や問題に感じる言動、また入所・利用する理由となった背景を知ったことについて、学生がそれらをどのように捉えているかということに関するコードが抽出された。

まず、『言動』については、各施設における特徴的な利用児・者が持つ問題に感じる言動がコードとして抽出された。また『入所背景』では、会議や職員から口頭で、施設によっては個人票やケース記録を閲覧させてもらったり、時には利用児・者本人からの語りによって彼らに関する情報を知ることができていた。

これらのコードはネガティブな印象を与えがちであり、学生にとってはあまり直面したくない事柄と考えることもできるが、本研究でコーディングされたインタビュー内容には、「施設だとそういうのをいっぱい見の中で、今、子どもの心がどういう状況なのかを考えさせられることが多かった」「家庭で大切にされて来なかったって思うと、もっと可愛がってあげたいと思いました」「虐待や家庭の事情とかをポロっと聞くこともあったし、それを受け入れるのに最初は戸惑いました。でもそれも少しずつ受け入れられるようになりました。それはその子をずっと思っていたから」とあるように、『言動』や『背景』を知ることによって、問題に感じる言動をただの問題で終わらせず、利用児・者の情報は、学生たちの支援に対する真摯な気持ちを引き出し、さらなる学習意欲や就職に対する志向を高

めていたことが示唆された。

### ④専門的な支援

このカテゴリでは、実習で出会った職員が実践していた専門性に関わる業務について、学生が見聞きした内容に関するコードが抽出された。

『情報の共有と連携』では、朝礼、カンファレンス、引継ぎ、施設内連携、外部機関との連携といった、様々な場所で利用児・者に対する施設内外を含めた連携が取られていることを学生が体験的に学習していたことが語られた。多くの学生が言及していたのは、担当以外の利用児・者のことを職員全体で把握しており、施設全体で利用児・者を支えているように感じた者が多かったことである。「問題のあった寮の先生たちを『大変だったでしょ』って励ましてるんですよ。一人の意見だけじゃなくて、チームで支援しているのを見ました」という語りがあるように、単なる情報だけでなく、職員の情報や職務上の悩みを共有する場面を見ることで、職員組織の専門性やチーム支援の実際を垣間見ている。

『専門職や支援技術』では、各施設における専門職の専門的な支援やそれぞれ種別ごとの保育士の褒め方や注意の仕方、職員集団の標準化された支援、尊厳を守る関わり等、ケアワークやソーシャルワークにおける様々な専門技術が抽出された。コミュニケーション技術や愛着をはじめとしたそれぞれの領域における支援技術を目の当たりにした学生は、幼稚園・保育所、自身の子育て等、子どもに関わる様々な場面で適用できる技術だと認識し、専門職の「知識や判断力」を見ることで「プロだなと思いました」と語っている。また、多くの学生が、会議やカンファレンス等に参加し、そこで話される様々な内容を見聞きしていたことが語られた。「その子の現状と次の支援方針、親御さんが今どういう状況にあるのかっていうのもしっかり時間をとって話していて、それを私は保育所で見

ことはできなかった」とあるように、職員集団それぞれが自分の領域を犯さずに理論的に利用児・者のケアにおける視点を共有することで、職員集団全体の専門性の高さを感じたと語る者もいた。

幼稚園や保育所における実習で見えにくいものの一つが『保護者支援』である。児童発達支援センターで実習した者は、実際に保護者の話を傾聴したり、「生活で実践できることについて親御さんが注目できるように」保護者に専門的な所見を伝えることで、保護者のエンパワメントを行っていることに注目していた。一方、児童養護施設や乳児院では、「施設に勝手に電話をして来ちゃう親」の対応等、問題視される保護者の言動とその対応について職員から聞くことで学びを深めている者もいた。保護者支援においても、実習で職員の支援を見たり、職員から支援内容を直接聞いた学生の多くがその高い専門性を体験してきたことが明らかとなった。

#### ⑤身につけた力

このカテゴリでは、実習の様々な場面を通して学生が身につけた支援技術や支援者としての視点が抽出された。

『支援技術』では、障がい系施設で介助技術、非言語コミュニケーションについて、「そんなに表情に出る方が多くはなかったので、上手くいっていたのかはわからないんですけど。嫌がられたりはしなかった」と語られ、養護系施設では、コミュニケーション力について、「伝え方は、分かりやすく、具体的に、短く。そういう関わり方が支援者の力として身についたと思う」とあるように、どちらの領域でも、実習前半は利用児・者の姿に戸惑いながらも、職員の支援を模範に少しずつ支援技術を体得していき、そのことを学生自身の自信につなげていた。このように、体系的に確立された支援技術を段階的に体得したことで、学生たちは自己効力感を高めていったと考えられる。

『支援技術』のサブカテゴリの中で特筆すべきはアセスメント力についてである。痼癪をおこす利用児に対して、「今、子どもの心がどういう状況なのかを考えさせられることが多かった」と語る者や、「その子の背景を踏まえた上で、今の支援を考えなければいけないという見方をしようと思いました」と語る者もいるように、支援を必要とする利用児・者と出会う中で、彼らに対するアセスメント力を高めていく様子や、彼らの最善の利益について思考を深めていたことが語られた。その際、ある学生は、「実習担当の先生からケースの話聞いて、支援の方法を考えさせられて、それに対する必要な情報を教えてもらうことで、支援者として考える力が身についたと思います」と語っていた。実習プログラムの中に体験型の実習だけでなく、授業型のプログラムを独自に組み込んでいる施設では、学生は利用児・者の姿を見つ、ライブ・スーパービジョンを実施してもらうことで、現任訓練に近い効果をもたらし、学生は実際の利用児・者への関わりと職員からのスーパービジョンを統合させ、アセスメント力を高めていたと考えられる。

『援助者としての態度』では、バイステックの7原則の中にある、個別化、意図的な感情表出、統制された情緒的関与、受容、非審判的態度が抽出された。特に顕著であったのは統制された情緒的関与で、「どんなに無視されても、『おはよう』と『おやすみ』『いってらっしゃい』は、頑張る言うようにしていました」と語られているように、上述した背景等を職員から聞いた学生は、利用児・者の支援を見据え、自分の感情をコントロールしていることが理解できた。バイステックの7原則の各項目そのものについて学生が語った訳ではないが、学生の語りからこれらの技術を実践していることが明らかとなった。

#### ⑥意識の変化

このカテゴリでは、実習によって、学生自身

に保育者や支援者として、どのような意識の変化が起きたかということについて語られた内容が抽出された。

『学習意欲の向上』に関して、幼稚園・保育所と異なり、施設実習では実習が始まるまで利用児・者の姿や支援の実際について多くの学生は想像することができずにいる。しかし、「学ばされてるっていう意識から、こんなこともあったんだ、もっと知っていききたいなっていう意識になりました」とあるように、施設実習が始まり、初めてそれらを体験した時、学生たちの学びに対する意識が増していったと考えられる。また、施設は何かしらの支援ニーズを持った者が利用しており、それに対する専門的な支援を見た学生は、「(職員からのアドバイスを)聞いて、私は表面的にしか人を捉えていないんだっていうのを自分に突きつけられた気がして。人を理解するっていうのは生優しいことじゃないんだって感じて、自分の変革の必要を感じました。」とあるように、自分も専門的な支援ができるようになりたいと考え始めるに至っていた。

『支援者の視点』では、実習の前はメディアや授業で利用児・者の現状について知る中で、被虐待児や障がいについて、ステレオタイプの考えを持っていた者が、実際の利用児・者と関わる中で、「子どもの悪いところがたくさん目につくけど、それだけじゃなくて、そうじゃないんだって頭を切り替えることができたのが施設だった」とあるように、偏見から抜け出し、支援者としての視点を持ちつつあるような語りが見られた。また、利用児・者と関わり、彼らの想いを肌で感じる中で、「施設は私という人間から、あげられるものがたくさんある。(中略)その子のいいところ見つけたり、愛をあげられると思った。」といった語りからも分かるように、利用児・者の想いを汲み取り、自分に何ができるか考え始めたと思われるような発言も見られた。中には、施設職員の支援全てが利用児・者の支援ニーズを満たしているのではないとい

うことを感じた時、彼らの福祉や将来的な幸せを考え、支援に答えが一つでないことに難しさを感じることで、受け身的な実習から、支援者としての視点を身につけ始めたと考えられる。この視点を実習の中で完結させず、次の幼稚園、保育所における実習や、実生活の中に取り込んでいる学生も多くいた。

## 5. 考察

本研究では、施設実習を実施した学生へのインタビューを通して、施設実習の経験が支援者としての力や視点の学びにつながり、学生の就職や今後の進路に深く関わっていることが明らかとなった。入学前には施設は将来の就職先としての選択範囲にはなかったと話す学生が多いことから、施設実習は、保育者志向から挫折した学生や一般企業へ就職しようとしている学生の将来のキャリア形成における選択肢の幅を広げていくことにもなる。本調査の結果から考察を深めたい。

一つ目に、施設実習においては施設の物的環境より人的環境に魅力を感じる学生が多いことである。学生の中には、実習前から施設に接点がある者もいた。これらの学生は既に施設実習に対するモチベーションとレディネスが整っているといえる。一方で、多くの学生は保育者養成校に入学するまでに施設に関連する事柄に接点を持たず、入学後に初めて授業の中で施設に関連する知識、支援内容、関わり方等を学ぶ者もあり、前者に比べて施設実習に対するハードルが高いといわざるをえない。しかし、本研究の分析結果を通して見えてきたことは、後者においても、実習中に会った利用児・者、施設職員との関わりや施設における生活環境、支援内容、技術等を実際に体験することにより、支援者としての意識が芽生えていったということである。実習における実体験によって獲得したものは大きく、施設そのものへの理解が深まることや施設の専門性に憧れを抱くことで、より関心が増幅され、さらにその先に進もうとする



意欲や向上心が養われることが考えられる。このことから、施設実習は現任訓練としての要素が強いと言えるのではないだろうか。職員と同じように会議や個人情報を知り、その上で支援を行ったことで、保育者としての意識が向上したと思われる。

次に、施設職員と利用児・者との関係性についてである。生活の中で利用児・者の成長発達に関わることを学んだ学生の多くは、施設の現場を家庭的要素に包まれた生活を営む場の様に感じ、それを心地良く感じたと言った。疑似家族とも言えるかもしれないが、血縁を重視した家族集団とは違い、緩やかな絆で結ばれた関係がある生活の場で、利用児・者、そして職員が心地よくも自然体でいると学生は感じとったといえる。このことは一見、前述した「支援者としての意識」とは相反するキーワードの様に見えるが、この生活の中で専門性を発揮しつつ、尚且つ支援を受ける側、提供する側の両方が自然体でいられること、しかし、その中で職員は業務をこなし、関わりの中に多くの専門性が発揮されていたことも学生たちは観察し、その両方、あるいはそれぞれとの間にある相互的なサイクルに魅力を感じていたと考えられる。このことから、施設における実習プログラムの中に、学生が利用児・者の生活の実態の「観察」、支援ニーズを拾い出すための「アセスメント」、実現性を判断するための「スーパービジョン」支援をつなげるような時間を組み込むことで効果的な実習が展開されると考えられる。

また、本研究では、調査対象者となった学生は、全て保育実習Ⅲを意欲的に履修している学生であり、その多くが実習プログラムの中で利用児・者の背景を知り得ていた。「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2（一般社団法人全国保育士養成協議会、2018、pp.82）では、施設実習の内容と課題の中で、発達・発育状況や社会性等の能力が身につけていなかったり、情緒的不安定により社会的に不適切な言動があり、これには「施設で暮らすまでの体験が背景

となっており、その背景を理解したうえでの対応が求められる。」と明記されているが、現状、この部分における施設からの情報提供は施設側の判断に一任されている。これらのことを鑑みると、入所理由をはじめとした利用児・者に関する情報の開示次第によって学生の学びの質が大きく左右されることが予測される。今後はミニマムスタンダードを養成校側だけでなく実習先へも周知していくことが求められる。

## 6. おわりに

本調査によって、保育士養成課程における施設実習が学生にどのような影響を与えているのか、また、施設で働きたいと思うようになった影響について、実習のどのような部分が影響を与えるのかということについてその一端が明らかとなった。保育者養成校においては、学生の実習配属の目安になることや、実習における学びの質の担保となることが考えられるであろう。また、学生にとっても、就職を検討する上での指標となることが考えられる。一方で、実習においてどのような体験が学生の支援技術や利用児・者に対する理解に影響を与えているのか等、カテゴリ間の相関関係や影響する重要性に着目するには至らなかった。今後は本調査の結果を元に、さらに分析を精査・検討していく必要がある。

本調査によって、施設実習が学生に与える影響の全容が解明されたわけではない。このような調査は、個々の学生のインタビュー面接に要する時間がかかるため、調査実施期間の制約もあった。この結果は学生の一部へのインタビューの結果に基づいての分析であり、それを一般化していくには量的分析も合わせて行うべきであることは筆者らも認識している。

また、本調査ではインタビュー対象者が配属された施設にバラつきがあり、特に入所型施設に偏っていたため、通所型の施設で実習した学生の語りは抽出されにくかった。しかし、同じ種類の施設であっても、支援者や支援方法、実

習内容が異なっている可能性が今回の調査で判明し、養成校側の実習に対する依頼内容よりも施設側の都合が優先されている可能性が示唆された。施設の種別によっては数が少なかったり、その性質上依頼しにくい等の理由により、全ての施設を網羅できないことを踏まえると、今後は施設実習の中でどの施設でも最低限学ぶことのできる標準化された実習プログラムを養成校側に周知していくことで、実習における学習内容が担保され、また学生の実習に対する姿勢や視点が、実習前にある程度見通しが立つことが考えられる。

## 参考文献

- 赤瀬川修、友川礼（2015）「保育士養成校における施設実習指導の課題：実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から（開学50周年記念特集号）」『松山東雲短期大学研究論集』45,11-19
- 柏女霊峰（2018）「改訂5年後の制度見直しに向けての課題と論点第1回 保育所保育指針を読む－福祉の視点と教育の視点」『保育通信4』2018年4月1日発行 第757号
- 河野清志（2011）「保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について」『山陽学園短期大学紀要』42, 29-35
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長（2015）『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』一部改正雇児発0331 第29号
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長（2018）『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』子発0427 第3号
- 保育士養成課程等検討会（2017）『保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～（検討の整理）』  
<https://hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/member/news/2017.html/review1.pdf>
- Udo Kuckartz（2014）Qualitative Text Analysis（＝2018、佐藤郁哉訳『質的テキスト分析法』新曜社）
- 一般社団法人全国保育士養成協議会（2018）『保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究』
- 一般社団法人全国保育士養成協議会（2018）『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2「協働」する保育士養成』中央法規出版 pp.82
- 岡田恵子（2008）「福祉施設における生活支援自己効力感尺度の作成」川崎医療福祉学会誌 18（1）,315-320